山とスキー

第七十四號

札幌　山とスキーの會　發行

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第七十四號目次

記事

天候の智識と山岳に於ける災害　Prof. Dr. A. De Quervain　岡田實譯　〔一〕

スキーワックスに就て　北大スキー部員　岡村源太郎　〔九〕

八溝山　大島亮吉　〔二〇〕

川名のアイヌ語解　—特に北海道山岳地方に於ける—　山口生　〔二六〕

不思議な話　加納生　〔二九〕

藏王日記（承前）　—三枝茂雄君の死—　額田敏　柏木民次郎　〔三三〕

ゴシップ　〔三九〕

寫眞版

クロステル・グリユンホルン

白雲岳より見たる烏帽子岳　近澤生

昭和二年八月發行

クロステル・グリユンホルン

天候の智識と山岳に於ける災害

Prof. DR. A. De Quervain.

北大スキー部員　岡田實譯

譯者――この一編は Ratgeiber für Bergsteiger (Zürich; art. Institut Orell Füssli. 1920. スイス山岳會發行第二版)からとつたもので、この本には相當の登山研究家が各部を分擔して書いてゐる。ここに記すのは即ちその一篇で、ドウ・ケルバンとは外科學者としての方がよりよく一般に知られてゐると思ふ。私の原本は相當古いもので更に新版が出來てゐるに違ひないと思ふ。引例なども大分古い。新版が手に入り次第增補訂正するとして、今はこの古い本による事にする。

山岳に於ける諸注意の中で天候の色々の智識に關する部分を述べる事が私にふり當てられた仕事である。もし私に選ばせてくれたならこんなテーマは色々の理由から私は採りはしなかつた。一体氣象の智識は今や餘程進歩して居り、尙凡ゆる科學に關係してゐるものであつて、まあ我々の知つてゐる事と云へばその小さな斷片にすぎないのである。まして平地とは違つて、地中海と太西洋の間にあつて天候の境界線となるアルペン地方や、こゝ邊りの變化の多い天氣を豫測する智識に就いてなら尙更らの事である。だから諸君は豪い期待をかけてこの一文に接する程のものではない。が、然しこの際に於て吾々は氣象の智識に就いて確りしたポシティブな結果にまで行き着かふ。ともかくも決して安直にではなく研究室の中で孵へされたものなのだから。

もし諸君が簡單でざつぱく乍ら實用上利用し樣としても、既に氣象の智識をお持ち合せでなかつたなら、この智識た

る實に用ひ得べくもない事である。そして假し簡單な事が分つて居たとした所で、これを實際の上に使はなければならない場合になれば、各自のもつと眞面目なもつと根強い努力が必要となる。で、もし單純乍らそれを持つておゐでになるとしたら、その天候の智識がどんな方法とどんな方向とに於て最もプラクティッシュに有効であり得るかといふ事を研究して、今日吾々は充分としなければならない。何となればかゝる實用上の意義が證明された時に於てのみ、人は更にその理由に對して注意を向ける樣になるので、それから初めてこう云ふ智識を体得する方法や經路を發見するものなのだ。この意味で私は此處には只暗示的に記すのみで、具体的の決定や觀測は個々の場合に取扱ふ事にする。私達の國の特有の天氣工合を注意して扱つてある特別の天氣の小冊子があるが、興味を持つお方には恐らく良いお役目を務め遂げるであらう。

山に於ける災害を避ける爲めの天候の智識にプラクティッシュの價値を適當に、與へるには、全然事實と云ふものから出發するのを最良とする。そして之等事實が――悲慘な引例である事よ――特に天候の影響に歸せらるべきであつてそして吾々のテーマに書き出しの誘因を與へた所のアルペンの災厄の數々であるのだ。悲しい事だが材料ならば缺乏してゐるとは云ひ得ない。私の集めた所によると、單に最近十年間に約百十人の旅行者がアルペンに於て何等かの天候に依る死をしてゐる。その中私は雪崩による災厄は天候と全く直接に關係あるものゝみを考に入れた。この大きな數字に接して私はすぐに、恰らく百人千人もの人が自分の精力(エネルギー)により又は運命の好意によつて、かゝる險惡な位置から再び幸福に家路に歸りついた事であらうと考へる。この災禍の表(ターベル)はそれ故全体のテーマの上には暗黑な蔭を投げはしないだらう。それはそれ丈で充分なのだ。

之らの無數の例の中から瑞西で起つた事件の數例をこの中に出來る丈短く引きぬいて來て、特に天候狀態の了解があれば災厄を免れ得たであつたらうか否かといふ事を主眼として少し研究の歩を進めて見やう。

この天候狀態を判定する事たる、今日まであらゆる例外はあるにはあつたが、たとへそれが將來の天候の判定に唯一の根據とすべき基礎とはならぬにしても、熟練した解釋に依つて日々の天氣圖(Wetterkarte)から割り出した氣壓と氣象狀

態とは常に最も重要なるものである。又バロメーターの觀測や、各觀測者に依る多くの天候徵候も、多くの場合この天氣圖と結び付けてみて初めて完全な價値を發するものである。が屢々天氣の模樣が天氣圖とは全然反對に表はれる事があるし、まゝ天氣圖の與へる豫報は全然通用せぬ事があり、結局各自の自身の觀測のみが最後に殘されてゐる事になる。そこで今述べた事に關して次の二つの問題が考へられる。

一、毎日の電信に依つて作製された天氣圖と天候の徵候とから判定された時々の天候狀態に從つて、注意の警報を旅にある旅行者達に送達し、且實行上之を實施する事が可能であるや否や、又は旅行者自身がかゝるものを作製し得るや否や。（彼等かそれらから結論を作るか作らぬかは別問題であり、同樣にすべての警報が各機關のその時の狀態に事實支配される事も別問題である。）

二、又別に、當該旅行者の中幾分か熟練した人は、それから何か注意の暗示でも獲るだらうから、はつきりした天候の模樣を彼等の途中に於て知らせねばならぬか否かの問題。

私は今更之等山の犧牲者達の裁判官なんか、特に必要だと主眼する事はないと思ふ。思ふに彼等の不幸なものから何かを學ぶべき吾々の義務を感ずるのである。この意味で私は之から、これらのそして最近ではないが起つた色々の事件からして一般的の數ヶの結論を得てみたいと思ふ。

まづ一つのティピッシュの事件の特徵の記述に移る。1904 から初める。

天候に基く救助の困難。

一、一九〇四、十二月の大晦日の前の日の午後、ムータタール(Montatal)に滯在して居たチューリッヒの學生がブラーゲルパスを越えてクレニタールに行かふと考へた。峠の頂上で彼は案内者を歸したがクレニタールに下りる際嵐の中で道を迷つてしまつて、次の日リヒソーホテルから僅か二十分しか離れてない所で（そこへ彼は埋められたが）凍死の身を發見された。

この時の天氣の狀態―十二月三十日に既に嵐が明らかに襲つて來る事は認められて居て、三十一日には早全く暴れ氣味だつた。これがうんと烈しくなる事は前から何の疑も有り得なかつた。それに不幸のあつた夜には氣溫は標高二五〇〇mの所でマイナス廿九度

にまで下つた。之は前の二日間よりも廿四度も低かつた。餘り高くない所で氣温が更に降下するとよく不運な轉歸（アウスガング）に貢献するものである。

二、一九〇五、四月二十三日にグリースパスの上で南側から來た二人の旅行者が吹雪の中で凍死した。その時の狀態は吹雪により外はよくは知られて居ない。天候は二十、廿一、廿二日には山では全く猛烈に降つた。（ゴットハルトで各 24, 52, 36cm）南側では雪が七〇〇mの所まで雪崩れた。然し不幸の前日二十二日には高くでは强い北風の爲に尙降つてたが南側ではノルドフェーン（Nordföhn）の爲にすつかり晴れ上つた。谷でこゝ快晴になつた爲旅人はその前三日間はそこの上は通れたと云ふ疑も置かず、上では尙續けて暴れて吹雪いてゐるといふ注意もせず山に行く決心をした。不幸のあつた夜はその上全く晴れて居て寒かつたので、それが前のプラーゲルパスの時の樣に不幸な轉歸（アウスガング）をとるまでに貢献したものであつたらう。

三、一九〇五、八月五日又は六日にユングフフウのジルベルリュツケで之も確かに嵐の爲に名の知られた二人のパスラーの旅行者がやられた。その時の狀況もよく知られては居ない。が當時の研究によるとやはりこの時も天候が大きな罪を負つてゐる。當時天候は八月五日に大暴れに暴れて、その後フェーンに續いて幾分樂觀されて居た。この事は既に丁度一日前にハッキリと天氣豫報に報ぜられてあつた。でこゝでは罹災者達は高山旅行のこの災害については豫告され得たであらうと云ふ可能性はあつたのである。それから嵐は又八月五日の午後から大暴れになつて一五〇〇mの所まで降りしきつた。

四、一九〇六、五月六日に三人のチューリッヒの學生がグレルニッシュの登山を企てたが、既にその前日には寒氣と降雪とを伴つて天候急變の兆が表はれて居た。彼等は大雪の中をグレルニッシュのヒュッテまで辿りついて、翌日そこから歸途に雪崩に遭遇し仲間の一人は慘死をとげた。之に向つた救助の一隊も言語に絶する大困難に遭つた。

彼等のこの計畫に對して天候が只に不適當であつたのみでなく、直接にも危險であつた事は彼等がチューリッヒを出發する時既に疑もない事であつた。

五、一九〇七、八月十五日—一行中のある者はこの日附をよく覺えて居た—A.A.Ö.Z.の三人の旅行者は伊太利側からマッターホルン登攀を企てた。頂上のすぐ下で丁度午後三時頃嵐が突發して翌日までこの暴しの中で岩壁の間に止まつて居なくてはならなかつた。一行中の一人は寒氣と疲勞との爲に死亡したのである。

天候はその日どう豫測されて居たか。八月十四日彼等がシュワルツゼーホテルを出發した日、まだ他所から報告を手に入れられたであつたらう日は、天氣は良好であつた。當日風になる樣な傾向は只不確實にだがあつたらしい。然し翌早朝彼等が本當に登行を初めるすぐ前に、その時はまだどうとも決定が可能であつたのだが、ある慣れた天文學者には全く疑もなく來るべき嵐の明瞭な前兆

が認められたに違ひない。この事はも少し後に述べる。又この事件の日の天氣圖を見ると、之は旅行者達には勿論利用され得かなかつたらうが、全く典型的に近く大嵐が起らなければならぬと云ふ事が認められた。（この大嵐は他でもアルペンに於て尙數人の犧牲者を出した。）この例はそれ故、旅行者が彼等自身の天候に對する智識に賴つてゐた事に依る例であつて、彼等は之を警戒し得るものであつたのだ。

六、一九〇八、七月十七日色々ないきさつで豫定を遲らかされた一行がユングフラウの頂上で一夜を明さねばならなかつた。一行中の一人の輕い負傷と惡天候とは下降を色々と間誤付かせた。災に見込まれた一行は遂にそこに止まつて凍えなければならなかつた。この場合を見ると、七月十六日一行が行動を起す日已に天候の豫測は高山の旅行に不適當であるといふ風だつた。かゝる天候の日こんな高山を歩くのには絶大な危險を覺悟してのみ企圖されるものだと云ふ事に、この旅行者達のオリエンテイールングは及び得たてあつたらうに。

七、一九〇九、七月十日ヒルストのカンデルステークでアーデルホルンに向ふ二人の英人が深い新雪の中で道を迷ひ、中の一人は墜死した。罹災者はホンの僅かの快晴につられて天氣は明らかに良くなつてはゐなかつたのに直ちに實行しやうと決心したらしい。そして第一上ては非常に强く降つて居り、天氣は又すぐ元の樣に惡くなるに違ひないといふ事を不注意にしたのだ。そしてこゝでも正當な天氣の豫測は可能であつたのだ。

八、一九〇九、九月五日から六日へかけての夜、ヲレンステッケ地方で一人のクリエンスの旅行者が吹雪の中で凍死した。彼は九月四日土曜日午後まだ天氣は普通と變りない時に、彼の同僚と出發したのであつた。天氣豫報はその時天氣が變化する事は報じたが、そう早く變化するとは傳へられなかつた。が天氣が惡くなり出した五日の朝には確かにまだ歸途につき得る可能性はあつたのだ、が旅人はこの天氣がどれほど續くかを少しも判斷せずに只霧と雪の中をドン〳〵と踏み進んで行つた。更に惡い事には一型通りに行つたのだが—不幸な夜も朝に近づくと段々と晴れ上つて來た。こうした變化は非常に强い放射作用の爲に偉大な凍死の危險を惹起すもので、この作用は高い所では谷に於けるより二倍も三倍も大きい。この高所の劇烈な溫度放散は屢々充分人の頭に考へ入れられてない所のものである。

九、一九〇九、九月十日から十一日にかけてユングフラウの登行の歸途ベルグリヒュッテ附近で、二つの別の團体に屬する四人の登山家が嵐と吹雪の中で凍死した。その中の一人は後で助かつて歸つた。

天候は次の如くであつた。この遭難者達が初め谷を出發した九月九日早朝には當時只一つあつた天氣圖と天候の徵候とから押して別に心深い注意をする事は何の理由もない如くであつた。（彼等が早朝グリンデルワルトから出發したか、ユングフラウ道に依つた

か之なら餘程後になるが—私はそれをお知らせする事は出來ない）外國電報に依る天氣狀態もこの日の午前中では警戒を强ふる程のものではなかつた。果然慘事のあつた日十日の天氣圖はフランスにまたがる特有の暴風雨のカーブを描いた。然しも早この警報を受けるには一行は餘りに遠くまで行つて居た。この暴風は午後の四時にはベルナールアルペンを襲つたが、十日早朝十時ベルグリヒュッテを出發する時には已に、惡い天候が來る兆が一行には明らかに認められて居たに違ひない。何となればフェーンが昨夜夜通し嵐の如く吹き荒んでゐたから。そして本當の暴風は夕方八時頃になつてやつとやつて來た。

こゝに久別問題がある。それは雪原に迷つた人達は、もし彼等が確かりした案内者を雇つて居たならば暴れの來る前に露營をしないで居つたらうかといふ事である。氣溫は氷點下を降る事僅かで決して寒くはなかつた。雪を積み上げたりなどしてその一夜を過す事は出來ない事ではなかつたらうと思はれる。

十、一九一〇、一月十六日リンタールからクラリーデンヒュッテに向つてチューリッヒの旅行者が二人立つて、十七日には永河を越えてヒューヒヒュッテに着いた。こゝで二人は五日間といふものは雪に閉ぢ込められて滯在しなければならなかつた。それから峠を越えてクラリデンヒュッテに歸つて行つた。どうして彼等はこうしたかはつきりと知る人は一人もない。

その邊の天候と全体の天候狀態は彼等がチューリッヒを出發する時から既に惡かつた。只決行は不可能であると云へない丈のものであつたが山に行つた人が呼び習はしてゐる危險はやはり起つた。天氣豫報を期待するは意味ある事である。

十一、一九一〇、七月八日その以前から上では約2m程も雪が降つてゐたが、晴れかゝつて一時間もたゝぬ内に八人の旅行者と案内者が（この中には有名な Alexander Burgener 氏も居たが）アイスメールの停車場からベルグヒュッテに向つて出發して、雪崩に見舞はれた。之はヒュッテの番人がズツと近づいた一行の爲に道を作つた爲に起つたに違ひないと考へられる。

この前からの天氣の工合では危險といふ事に對して何の心配も起し得なかつた。確かにそこではまた雪崩の危離は一度も知られて居なかつたのである。

十二、一九一〇、八月十六日又は怖らく十六日と十七日との間の夜中ひどい嵐の中をチューリッヒから三人の有名な登山家がユングフラウに、確とは知られて居ない樣なコンディションでやつて來た。

常に天候の突變が不幸主原因である。前日即八月十五日には天氣圖は豫報に一致して朝の中既に全く劇しい嵐を示してゐたので、ロートターールから昇つて來た一行は尙都合好い時に警報を受け得られたらうと想像される。然し夜に入るとオーベルランドは勿論瑞西全体は怖ろしく暴れ出して十六日の朝ヒュッテから登行する前にはそこでもひどく天氣の調子が惡いので、他の登山隊は歸つてしまつた。只三人の登山家は敢えて不幸に陷るべく登行を主張したのである。その時大事な智識があればよかつたであらうに。

十三、一九一二、三月廿四日セブテイメルバスにサンモリツツから來た一人のスキーヤーが、吹雪の中で疲勞と寒氣に惱まされて遂に死亡した。天候はもう永い事惡くつて、その日も朝少しは良くなつたがそれもほんの通りがゝりのほどのものだつた。天氣は續いて完全に快復するとは豫期されなかつたし、上では暴れさへして居た。然し少しでも晴れ上るとアルペンに居るもうシビレを切らして居る人達は之を素早く利用し樣とするもので、この不忍耐がこのスキーヤーに、そして翌日にはその外アルペンに居た他の十五人の旅行者にも命を取る程の大きな事をしてしまつたのである。迅速なバロメーターの上昇と迅速な快晴とが來たのだから、も早や天候は暴れ狂ふ事もなく、他所から見ればまだ危險は優にあるといふ事も考へずに、すぐ嵐は散り去るだらうといふ樣な心理的の狀態がきつとこの人達には通じて働いたのであつたらう。

十四、一九一二、七月廿一日有名な登山家ドクトルアーエフ氏はアレツテエホルンで珍らしい惡天候の爲に遭難した。氏はその同僚と共に既に露營をやつてゐたのだが、確か同僚はもう相當堪え難い迄になつて居た。そして翌日嵐に遭遇したのである。

天候は前からズーツと惡くて七月廿一日にホンの僅かの間晴れ上つた。この僅かな晴れ間がたとへ全体としては模樣は惡かつたが登つてしまへと旅行者達を誘つた。氏の組も同じく之につられたのである。天氣豫報は旅行者には勿論届かなかつたし、みんな自己の判斷でやらなければならないのだつた。

一五、最後に私は全く判明せずに今日までそのまゝになつてゐた事件をこゝに引例しやう。一九一三、十二月二十八日—此の日には之許りではなかつたが—ベルネルオーベルランドで軍隊の一團が雪崩に遭遇し、この時ベルンの一紳士も災厄を蒙つた。一般にその主原因はこの哀れな軍隊がこゝの特有の危險なるを顧ず、直ちに新らしい猛烈な積雪の中に無暗に踏み込んで行つた爲だらうと云はれてゐる。然しこゝではこの想像は當嵌まらぬ。停車場での測定の時には、この猛烈な新雪なるものは殆ど發見出來ない。むしろ永く續いた風に依つて雪が危險な雪崩を起した爲である。

さあこれから、私達は之らの無味乾燥なリストから、色々の經驗を基として最後の結論を見出さう。そうする事は今や吾々には許されてもいゝ事だらう。

第一出發、登行の前に一般の天候報告（電信による天氣圖を基として）この利用の問題である。吾々は上にのべた色々の例からこう結論し得る。遭難した所の大部分即その七十プロセントは正しくオリエンテイーレンされ警戒されたこの種の報告を手に入れ得たのであつて、恐らく他の人にもそれを知らせ、この人達にも多かれ少かれ利用し遵はせ得たのである

例へば最後に知らせてもらつた人々は、その旅行を全然斷念せぬまでも、その目的を少しは低く小さく目論む樣にはなつたらう。

で吾々はかゝる色々の報告を從ひ守る事を弛にしたりしてはならぬ事は明な事である。吾々は深く天氣圖の徵候に忠實であるべきで「天氣の狀態は今此の如し」と常に言ひ慣はされる程でなければならぬ。決定はこれに依つて易くつくものである。又ある確かな特別の狀態については旅行者は深くオリエンティールトでなければならぬ。例へば「暴風の低氣壓がフランスに亘つてある」との報告を受ける丈で充分である。それに依つて旅行者は今問題になる旅行の目的に對して之がどんなに意味のあるものかを悟れば問題は極く簡單で即ち、斷然敢行するか、又はせぬか、或は目的をこの際變更するか？である。

スキーワックスに就いて

岡村源太郎

我々が常に注意すべきスキーの處置は極めて多方面に多くの智識を以て行はなければならない。締具の樣式、靴底の位置、彈力性强靱性の保存、塗料の選擇等の問題に疑問の眼を向けずには居られない。殊に近年多くの注目をひいて來た塗料に就いての研究も漸く重きを爲して來た。一般スキー家はスキーワックスに深く着眼し、スキー製造者は材の塗り上げ保存等に着々効を收めつゝある。

雪とスキーとワックスの關係の微妙なる事は實に驚異的で、多くの秘密を藏して居る。之は今まで多くのスキー家に依つて驚嘆されて居る事である。このうちワックスは雪の如く天然の賜物ならず人工的の組成物である所より、ワックスの秘密は益々深く進められ、多くのスキー家を惱まし又は歡喜せしめたものである。

ずつと以前のホルメンコーレンでも或る無名選手の不思議な勝利は、實に此の現在稱へらるゝシュタイグワックスの發現に依つた事は歴史的事實のやうにされて居るが、猶近時になつても一九二二年にはスキーコング、ハウグでさへ芬蘭選手ネコやコリンに大敗して居る　ワックスで破れる時如何なる常勝選手も悲慘である。まだ北歐は技術其の他の點で南歐選手に勝つて居る事は、今年のコルチナの國際大會の成績でも知られるのであるが、その一要素として恐らくワックスにも相當の隔りが兩者の間に存するのではあるまいか。

我國に於ける所謂登り蠟の使用は恐らく一九二四年頃からと思ふ。私も當時札幌豫選會に於て目茶な塗り方をしたがり

レーレースの登りで非常な効を奏したと考へて居る。同年の高田の全國大會ではコースが滑降競走であつた爲に、餘りシュタイグワックスの研究は爲されなかつたが、單に滑るだけの蠟に就いては此の年は一般に非常に重んぜられた。當時のスキーの單なる滑りが競技の勝敗を支配するに甚だ重きを爲したからである。かくてワックスの重要さに全國選手が注目し始めた。

翌年の大鰐の大會からはディスタンスレースに於ける早大の絶對的の勝利の裏に、此のワックスに加ふるに注意深い技術の選擇が効を奏して居た。殊に Ski mit Wachs に最も優れて居た早大の登りの強さは實に一大驚異であつたに相違ない更に昨年の樺太ではワックスの活用不充分であつたとしても、優秀タイムは或程度までワックスの力に負ふ所があつた筈である。ワックスの重要さに對して今左に私の練習成績より一つの實例を示して見よう。

練習時日　大正十五年十二月十七日午前十時頃

約一千米弱の登行スロープ疾走タイム―（六回）（括弧内は滑走順序を示す）

第一回　八分〇四秒……（一）
第二回　七分四八秒……（三）
第三回　七分四五秒……（五）
第四回　七分四三秒　……（七）
第五回　七分四一秒……（九）
第六回　七分四二秒……（十一）

同じ約一千米スロープ滑降速度（「活」字弱印は努力せずに滑降せる時のタイム）

第一回　二分一〇秒……（二）
第二回　二分一八秒……（四
第三回　二分四六秒「弱」…（六）

第四回　三分〇四秒「弱」…（八）
第五回　三　分「弱」…（十）
第六回　三分一六秒……（十二）

氣溫（正午華氏三三度）雪質、細粒狀稍々硬し。

スキー、イタヤの材で三七〇匁の重量

ワツクス、オーストバイのクリステル及びメデウイム

讀者はこゝに表はされた合計十二回のタイムより直ちに知らるゝ如く、登行のタイムは適當の努力を以て何回も試みたにも拘はらず殆ど大した變化がなく、八分四秒乃至七分四〇秒の間を六回共往復して居る。然し後になる程タイムが良好になつて行く傾向がある。然るに滑降タイムは第一回の時の努力せるスピードと第六回の時の努力せるスピードに驚くべき一分六秒の差がある。二分台で滑れるスロープが一時間位の滑走の後に（即ち約十粁練習後）は三分以内では滑れなくなつてしまつたのである。三分十八秒も要して居る。之は實に注意すべき事である。

此の滑降速度が登行速度の不變なのに比して驚く程變る原因は何處にあるか、之は最も大きな影響はワツクスに在るのである。當日は稍氣溫高い冬の日であつた爲日光の照つて來ると共に滑降スピードは遲くなるのが當然であつた事も事實であるが、單に一時間の氣溫の變化が五〇％のスピードの變化を來さしめる事は殆ど考へられない。即ち當日の雪は硬かつた爲に且つ使用スキーが薄過ぎた爲に、滑降を助けて居たワツクスが數回の滑走でひどく削り落されつゝあつたからである。ワツクスがスキー底面より消失して行くのに反比例して、滑降時間は增加して行つた。始め二分十秒で降れた同一場所が次には八秒餘計かゝり、最後には如何に努力しても三分以内では降れなかつたのである。ワツクスが少くなつた爲にスピードが鈍くなつた。スピードの變化は即ち私の技術が急に下手になつた爲でも、疲勞した爲でもない。ワツクスがスピードを五〇％も支配したのである。

次に此の例の對照として、良好な雪質（氣溫低く正午二三度、午後三時頃の滑走）の場合の例を示す。此の時はワツク

スが常に倒り落されず生命長く保たれて居た爲に、殆ど登降スピードに變化無いのが認められる。唯第一回の登りはラッセル疾走であつたから五〇%近く遲いだけである。即ち次の如き割合に不變のタイムが各々表はれて居る。

時日　十二月二十四日午後

登行　第一回　八分四五秒……(一)
　　第二回　八分〇八秒……(二)
　　第三回　八分〇秒……(四)
　　第四回　七分五六秒……(六)
滑降　第一回　二分三六秒……(三)
　　第二回　二分三二秒……(五)
　　第三回　二分三三秒……(七)

誠に不完全な實驗例を示したわけであるが、ワックスが生命長い時と短い時とで、數字の如きスピードの變化がある事に依つてワックスの重要さを大略了解せられたと思ふ。十粁强の滑走で最後の一粁滑降で一分も相當するのであるから、三十粁乃至五十粁競走では全体で「ワックスが長持ちしなかつたので五分以上遲れた」と云ふやうな場合が確かに有り得る筈である。競技成績に影響する事は甚大である。

かくも重大であつて少くとも相當の影響が常にあるであらう所のスキーワックスに對する我等の智識は余りに貧弱である。ワックスに注意するやうになつてからも實に數年にもなつて居ない。幼稚なのが當然かも知れないが、もつと深い探究が必要であると思ふ。競走の場合には以上の如く微妙で且つその影響する所は大きいが、登山でも相當のワックステクニックは知つておく必要がある。一般のスキー家が一つの隊形を爲して登山する場合にも今後大いに注意すべき事なのである。もつと心地よくエネルギーを節約して登山する爲のワックスを識るべきで、その智識もディスタンスレース研究者の力に俟つ所が少くない。今後益々此のワックスに研究を進めてスキーの滑走をもつと〳〵早く樂しくしたいものである。

スキーワックスに關しての文献は未だ我國では滿足すべき解決を與へた記事を見て居ない。眼新しいものは皆外國書籍の譯述で、それも簡單過ぎてさつぱり了解せられさうもない。ほんとうに突込んで研究されんとする化學者兼スキー家を得たいものである。

私自身も貧しい經驗の中に殘されたワックスの智識は、何等此處に述べる價値が無いのであるが、先の實例はワックスの重要さ又は價値を知つて頂く爲にさらけ出したのである。又我々の使用して居るワックスの大要を述べて諸兄の深い經驗に依るワックステクニックを以て補足を與へて頂きたい。

ワックスの種類は極めて多いが、大抵大同小異である場合が多い。然しその大同小異中の小異も大長距離滑走に際しては大異となるから油斷が出來ない。今小異のものは同じグループにまとめて見ると、ワックスも全て整頓されてそれ〴〵の性質の相似たものに配列される。即ち或る一つの分類を爲す事が出來る。實際的には此のワックスの分類も使用目的に依つて爲されるのが便利である。單に使用目的と云ふても相當複雜な問題であるが、元來ワックスの効用は大別して三つと爲す事が出來ると思ふ。

一、グライテン（滑）を助ける。

二、シュテムメン（不滑）を助ける。

三、雪の附着を防ぐ。

此の第一項と第三項は内容に於て同じかも知れないが、之等の要素が別々に應用せられたとして居る事もある關係からかく分けておいた。普通グレンデラウフ又は競走では此の三要素を兼ね備へた Ski mit Wachs を處置する事が理想である。然しシュテムメンに好都合であるものは、グライテンに劣る事は普通のワックスの通弊で容易に理想に達し難いものである。スキーでも同樣である。之に反してワックスが上述の各章一要素だけを滿足させようとして用ひられる場合にはワックスの選擇や製作は甚だ容易である。濕雪がスキーに附着して非常に當惑する時、先づスキー底面にパラフインか白

蠟を塗るのは第三の目的即ちスキーに雪の附着しないようにパラフインを用ひたのである。之は登行の時でも必要な事でスキーに雪が大根の様にくつ着いては後滑りは爲まいが決して樂な登行の出來るもので無い。次にスキーが下降雪面に向つた時、パラフインは良く滑る爲に即ちグライテンの目的に適ふやうにと作用して居る。此の時雪質がスキーに附着し易い濕雪であつた時は、パラフインは第一及び第三の要素を共に滿足せしむる所の好く滑つて決して雪の附着しない作用をスキーに與へるワックスであると云はれるのである。

更に或種の雪質でパラフインを塗つたスキーで、相當の急な斜面でも眞直に登れるやうな場合があれば、此の時はパラフインは第二の要素であるシユテムメンをも助けて居る。パラフインが塗られてあつても殆ど後滑り爲ない場合である。(勿論此の時は Ski mit Wachs なる別の問題が關係して居るけれども) 此の時は此のパラフインはスキーを滑らす爲にも滑らせない爲にも作用して居るらしい。即ちパラフインは此の時グライテン及びシユテムメンを共に相當の程度に滿足せしめて居る。

雪の粘着性は輕度に濕氣を帶びる粉雪に於て最も高い。從つて此の時ワックスを塗ると雪が附着しないのは、ワックスと雪との粘着力が殆ど無いからであらう。パラフインは如何なる雪とも粘着力が無いと云ふて良い程に、此の目的にはパラフインが大いに賞用されて居る。次にスキーワックスはグライテンの要素を助けるのは、大部分摩擦係數の場合に依るものであらう。雪と Ski mit Wachs との間の運動の摩擦係數が小なれば小なる程滑降速度が早いわけである。

次にシユテムメンを支配する要素に靜止の摩擦係數を考へに入れておくべき事は、既に本誌に述べた積りであるが、更により一層シユテムメンを助けるものは中絶せられ易き粘着力である。中絶せられ易き粘着力とは一寸形容するに多くの言葉を用ひなければならないが、兎も角所謂シユタイグワックスの生命とする性質の一つである。之ある爲に登りにも雪はワックス及びスキーに粘着して、かなり急な斜面でも後滑りを爲ないのである。極めて良好な條件のもとに於ては、二十度以上のスロープを斷け登る事が出來て、單なる緩速度の直登行が三十度近くまで出來る時もある。而もその粘着力は

決して執こくなくて一寸したはづみで直ちに中絶される利益がある。從つて粘着力の働かなくなつた狀態殊に急速な滑降の時は、ワックスの粘着性は全くネグレクトされて唯スキーワックスのグライテンのみがその効を發揮して居る。ゲレンデラウフに最も適當した塗蠟法はかくの如くスキーを處理する點に存するのである。

ワックスの効用は以上の如く三つに分けて考へられるが之等の三効用は各々が單一の目的に沿うやうにワックスを撰擇する場合と、その内の二つ又は三つ全てに目的が適ふやうにワックスを塗る場合がある。

即ち單一（此處に云ふ單一も大抵第三項の効果を必要とする）の効用だけ在れば良い場合は、登頂せんとする時登り蠟即ちほんとうのシュタイグワックスを用ひて、ワックスを用ひないよりも急角度に若くは他の滑り蠟を塗つた時より遙かに急に登る時である。此の時はスキーは唯後滑りさしへないでぐん〳〵急角度の電光形登行をやり又は開脚登行を殆ど行はずに直登する事が出來る。かゝる際に用ひられるワックスは、唯後滑りさへしなければ好いのであるから、滑りの事は餘り重く考へる必要がない。頂上でシュタイグワックスを拭ひ落すか又は滑り一方の蠟に塗り換えられる時は殊に然うであつて、登りと降りにそれ〴〵異るワックスの力を藉りて樂な速やかな滑走をする事が出來る。注意すべき事はシュタイグワックスを餘り多く塗り過ぎない事で、之にさへ氣を付けておけば雪がワックスが重くなつて固る事は無い。氣温とワックスの關係にも極く粗雜な注意をするだけでも、何時もシュタイグワックスの効果を得られる筈である。

降りの速度を增すように即ちグライテンの性質を高める爲に用ひられるワックスは、人に依つてはグライトワックスと稱へる。又我々も嚴格な意味で表示する時でも Als Gleit wachs anwenden としてグライトワックスの名を用ひるのが常である。此のグライテン專門に用ひられるワックスは非常に多く、從來のワックスの効用の大部分を務めて居た。現在も山頂で之から全て下降ばかりとなる場合や、スキージャムピンダで最高のアプローチのスピードとランディング後の圓滑な滑走を得る爲に、滑り一方のワックスを用ひるのが常である。先づ後滑りはいくらしてもかまはないから出來るだけ滑りさへすれば好いと云ふ主義である。そして登り蠟でも或意味では同樣であるが、雪のスキーに粘着して滑走を妨げるのを

避ける上に大いに役立つて居るのである。此の雪の附着を避ける事は、如何なる場合に用ひられるワックスでも然うでありたいもので、從つて雪がひどく附着せずに而も後滑りを防ぎ得るワックスと次に雪は全く附着せず滑りだけを最も好くするワックスが

一、シュタイグワックス　Steig wachs（登り蠟）

二、グライトワックス　Gleit wachs（滑り蠟）

として分ち表はされ得るであらう。

一つのワックスを取り出して、之が登り蠟であるか滑り蠟であるかは、そのワックスの説明文で大抵了解出來る。説明の無いものは殆ど全てグライトワックスである。

然し此處に一言しなければならないのは、スキー登山に於てこそ登り蠟で後滑りを防ぎ、ジャムプで滑り蠟を用ひ最大速度を出そうとするが、競走ではかゝる區分的の使用法は非常に損で一つの蠟でグライテンにもシュテムメンにも役立つやうにする必要がある。一つの蠟がシュタイグワックスであり且つグライトワックスであるのである。

現在我々の手にするシュタイグワックスは殆ど全てグライテンの要素の極めて豊かなシュタイグワックスである。大抵の場合之のみを適當に使用して、ゲレンデラウフ或はディスタンスレースで登り及び降りを自由に滑走して居る。又は所謂純粹のグライトワックスに同時にシュタイグワックスをコムビニーレンさせて使用する。

又殆ど常にグライトワックスとして使用して居るワックスでも、時として或種の雪では實に有効なシュタイグワックスに成る事がある。之等數多の事實の示す所に從つてワックスを總括して見ると、シュタイグワックス或はグライトワックスなる言葉はその使用する瞬間にのみで、然う云はれるのであつて、兩者の間に確然たる差異もなければ又定まつた各種の雪に對する性狀を正しく解握する事は出來ない。使用するスキー材に依つてもひどく相違する。シュタイグワックスに對する定義のやうなものも、判然と鋭く決める事は少しむつかしい。

然しながら現在ワックスの主成分として使用せられて居る所のパラフィン及びビーネワックス（密蠟）は、大抵の場合はグライトワックスとしてのみ用ひられる關係から、強ひてグライトワックスをワックスより分ち出すとすれば之等のパラフィン及びビーネワックスのみを塗蠟する時や、之等が非常に多く含まれ他の粘着成分の甚だ少いワックスは、所謂グライトワックスとしてシュタイグワックスと別にする事が出來る。

かゝる考へから現在我々の嘗て使用したスキーワックスを分類して見ると次の如く分つのが便利であらうと考へられる

スキーワックス（スキー蠟）

一、グライトワックス（滑り蠟）

（イ）パラフィン及びパラフィンを主成分とするもの。（濕雪に適するワックス）

例——各種融解點を異にするパラフィン、市上に販賣せらるゝ安價なる蠟、Bernina, Skiolin（固形）

（ロ）ビーネワックス（密蠟）及び之を主成分とするもの。（乾雪に適す）

例——日本產密蠟、Hopskivoks（Östbye）, Emätyse

二、シュタイグワックス（登り蠟）

（イ）ターワックス（タールを割合多く含み濕雪或は硬雪に適す）

例——市上にチューブ入りとして販賣せらるゝ日本製品　Klister（Östbye）, Skaresmörning（Östbye）Sandström Nr. 2, Uttuns Nr. 5, Bratlies

（ロ）ビーネワックス（蜜蠟を主成分として氣溫零度以下の雪に適す）

例——Bratlies, Medium 及び Mix（Östdye）Uttuns, Sohm の線

毎年新しいワックスが次ぎ〳〵に製造される今日、幾十種のワックスを全て短い期間に使用して見る事が出來ない爲め私のワックスに對する概略的の見解にも隨分欠陷がある事と信ずるが、大体の分脈は恐らく之に近い系統に沿ふて居るで

あらうと想像する。かゝる分類をする上にも私自身に既に先に述べたやうな議論が與へられるのであるから、之は一ッの假定のもとに多くのワックスを分けて見たに過ぎない。之等のワックスの詳細な成分や處方は暫く化學者の手に讓つて、私は次に之等のワックスの概括的の特質を實際の上から簡單に述べて、一先づ本稿を終りたいと思ふ。

パラフイン　パイフィンは最も好く滑る蠟即ち最もグライテンに長じたワックスとせられて居る。ジャムブ用スキー蠟は此の部類に入り、ジャムバーの深く注意すべきワックスである。雪との粘着性は最も少いらしく、日本でも全國到る處で使用せられ、又その濕雪に適する關係上本州スキー地では廉價で得易いワックスの一ッとして賞用せられて居る然し之は後滑りし易いワックスである點が梢々ビーネワックスに劣るらしく、シュテムメンの性質に缺く所が多い。又低温で破れ易くてスキーより落ち易い欠點がある。從つて又塗蠟には殆ど常に火力を用ひなければならない。之に少しく粘着性を與へワックスのスキーに對する生命を長くし、單に手の摩擦だけに依つても充分にスキー底面に附着するやうに、パラフィンに色々の物質を混じたものが、所謂ワックスとして世上に極めて廣く販賣せられて居る。その成分の重さこそ差はあるが、木タール、密蠟、鑛物性又は植物性油、少量のゴム、樹脂等が含まれて居る爲に、或は軟かく或は硬い蠟又は色も種々雜多の差異を以て造作品として現はれて居る。安價なワックス程パラフィンの外の成分が少いので、パラフィンに近い性質を持つて居る爲に、塗蠟に擦してコテ又はバラを使用する必要がある。

蜜　蠟　ビーネワックスは我國では餘り一般には使用されて居ない。高價であり且つ暖いスキー地ではパラフィンの方がより適當であるからである。然しパラフィン蠟の一成分としてよく蜜蠟が少量含まれる事がある。割合に長持ちがして又他のワックス含有物とも愈合し易いので、注意深く長時間の滑走に適するやうな塗蠟には是非欠く事が出來ない。殊に寒國スキー地の之からの必需品である。

高價な歐洲製品として送られるグライトワックスは、殆ど全て此のビーネワックスを基礎として、之に他の間物質を含ませたものである。Cstbye の Hopskivoks 等は即ち之であるが、なか〳〵高價であるから、雖ろ蜜蠟を自分で購入して樹

脂でも混ぜて使用して居た方がよいとも思はれる。此のワックスは成るべく薄く平等に塗らなければならない。

ターワックス　粘稠な流動体を爲すワックスで、木タール等の液体成分が他のワックスに比して多量に含まれ、又ゴム等の粘着性物質が入つて居る。判創膏のやうに粘着力に富み一般にシュテムメンの性の少い濕雪でも(多く零度以上)之に依つて後滑りを防ぐ事が出來る。氣濕高い時は之を適當に塗れば又滑りの好いワックスとしてその用途が廣い。又隨時ビーネワックスの粘着糊のやうな物にも代用出來る。暖國スキー地では此のターワックスの使用法の呼吸がディスタンスレースの勝利を支配する最大要件の一ッである程に重んぜられて居る。

粒狀雪の如き濕度に影響せられて相當に變化した雪にも、ターワックスは甚だ適當して居る。Ostbye の Klister や Bratiles はターワックスの代表的のものであらう。我國でも此に匹敵し得るワックスの製造せらるゝに至つた事は喜ばしい。

ビーネワックス（登り）　氣溫の低い時はビーネワックスが最もゲレンデラウフに適して居る。割合に塗り易く、落ちにくく、好くシュテムメンし而も好く滑る。之にも内容の或成分の多少に依つて少しく氣溫や雪質に對して使用向きが異つて居るものがある。Ostbye でも Ututuns でも攝氏零下五度を境にしてその使用別をつけて居る。（本誌六十八號參照）木タールやゴムの含有されて居る事は確からしいが、その處方は精しくする事が出來ない。然し、乾雪に適するシュタイグワックスは、大抵容易に作り有効に應用する事が出來る。ソームの縁位には劣らぬワックスが直きに日本にも出來るであらう。但し、もつと好いワックスを作るとなると、今度はほんとうに彼地のスキーマンの直接の指導を受けねばなるまい。

之だけをくだらない事ながら書き並べた後、私の最も大きな疑問はワックスの製法の秘密か、ワックス使用法の秘密か或は又 Ski mit Wachs の關係により多くの秘密が藏されて居るかを知りたく思ふ。讀者諸兄の御指導を願ひます。

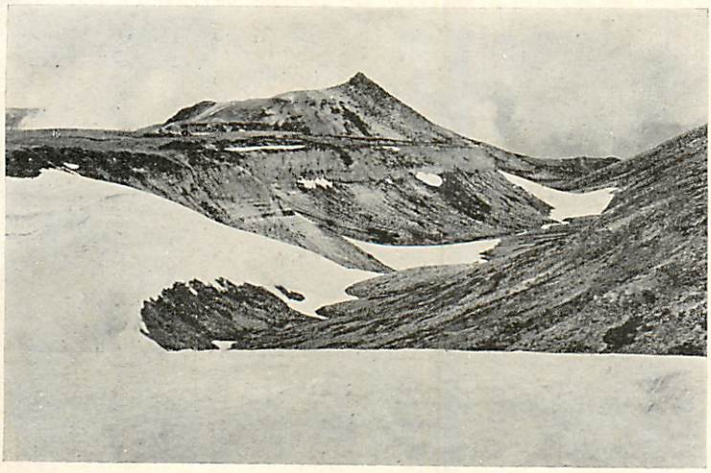
（四・二一八）

八溝山

大島亮吉

四月半ばに八溝山脈を越えて其の中で一番高い八溝山を登つたのも、小さい山旅ではあつたけれど仲々面白かつた私は其の時磐城の國の方から這入つて行つた。白河の町から出掛けて、次第に八溝山脈の山裾の方へと近づいて行くと、其處には彼の往昔の名高い奥州街道であつた、古い千年も昔の交通線が尙ほも其の山の麓に沿ふて同じ樣に古い村々を木の實の樣にくつつけ、爭はれぬ古さを持つた影と形とをもつて、地の上に一すぢの歩行線を畫いてゐた。靜かに埋もれてゐる關趾の記念物や碑石や廢道も、流石に一千年の明らかな日と夜との色とで、古さの匂ひに濕り潤ほつてゐた。そして此の邊りは何處へ行つても栗と楢と櫟との雜木林と枯草の野原とそして低い丘陵とが、離れ離れな村落と村落との間に續いてゐた。此の寂れた片田舍の疎林と枯草原の春の日向の中を、暫く雪の中にゐて、燿やかな雪の光りにも飽いてゐた私は暖かさにほてつてはかさかさと喜んで歩いた。書き遲れたが、其の時私は吾妻山群と磐梯裏の雪の中に約半個月ほど居た後の、其の歸途であつたのである。好い氣持で、久し振りの樣に足當りの異ふ枯草の上や地面の上、硬い村道の上を、私は厚い靴底で一日中足いた。スキーを附けて雪の上を歩くのとは少し異なつて眞實に地面をぢかぢかに踏んで歩いてゐる氣は確かに又言ひ知れぬ嬉しさであつた。

そんなことで私は午後晩く迄道もかまはず歩き廻つたものだから、其の晩の宿泊場所の見當を失くなしてしまつた



白雲岳より見たる烏帽子岳　　近澤生

夕暮近くになつてから漸く旅宿のあるだらうといふ、其處いらでは稍々大きな村らしいものを人に敎えられた。解り悪い林の中の道をたづね、たづねして、暗くなつて旅宿と云ふ其の昔の街道沿ひの目的の村に辿りついてみると、目的にしてゐた旅宿といふものはなかつた。一体此の地方は誰れも知るやうに日本でも名高い產馬地である。從つて大概の百姓家でも馬の二三頭は飼つてゐる。旅宿といふのも其のやうな村で、街道沿ひに古い村の家々は暗い軒こそ竝べてはゐれど、みな農耕の傍ら又馬を飼育してゐる。旅宿がないといふので、村人に尋ねて馬市の時期などには度々博勞を泊めることもあるといふ百姓家を軒並次ぎ次ぎにきゝ乍ら、私は一夜の旅泊を乞ふて歩いたが、然し皆何處でも斷はられてしまつた。次第に時間も晩くなるので、しまひには心細くなつてしまつた。そして到々とある一軒の家に哀願した格好で、それなら馬と一緒の場所でも好ければ、といふ條件でその家に泊めて貰ふこととなつた。

こう云ふ田舍の村とか山中深くの村では、見知らぬエトランゼ——殊に其れが都會からやつて來たものであつたならば特に、——を泊めるのを悪意なくに厭がつてゐる。それはその人々にとつて、例へば食べさせるに美味な食物がないとか、着せるに厚い蒲團がないとか、寢せるに格好な別な部屋がないとか、或ひはむさ苦しいとか云ふそれ等の人々の勝手に想像した一種の可愛らしい見榮のある氣苦勞の種となるからであらうと思ふ。併し乍ら一度泊めるとなれば、得て恁う云ふ樣な質朴な田舍の人々は全く親切だ。出來るだけのことをして待遇して呉れる。其の人達には決して打算から割り出されたものがないから嬉しい。私は斯う云ふ樣な山中の村とか、旅舍の無いやうな片田舍の村に無理に泊めて貰ふことをやらねばならない旅行を此れまで必要上少しはやつては來たが、多くの場合それは好印象を得た。其の樣な場合には賴むこちらにしても無理にと云ふのだから厭でもあるし、又泊つても普通の旅宿と異なつて遠慮もしなくてはならないが、又其等の氣兼、氣苦勞にも充分に換え得るだけの面白さがある。其れは眞實にこの樣な類ひの旅行の有する面白さの一つだらう。斯る旅泊の回想こそ愉しくも又懷しいものではないか。

此の旅宿の百姓家も私にとつては又其の一つであつた。私は其の夜ほんとに文字通りに馬と顏を竝べて其の家の圍

爐裡の傍に寢かされた。勝栗を嚙り、榾火を燻べ乍ら、私は其の家の老人とも又少年とも夜晩くまで愉しく話した。若い旅行者は家人から燈火の明るい都會についてのことをぽつぽつときかれるまゝに答へてやれば、彼れも又其の土地の風習とか、民話とか裡名とか、其他愚にもつかない樣な事に就てのいろいろのことを尋ねたりした。そして旅行者は斯ることよりして唯其の土地土地を唯だ眼と脚とだけよりしては感覺することの出來ない或る親はしいものを享感することが出來るのだ。

八溝山に登つたのは旅宿に泊つた其の翌日であつた。現在眼前に當時の地圖を展げて見なければ、其の時歩いた道は判然しないが、磐城と下野との國境の小さい峠を越へ、幾つか村を通り拔け、梓と云ふ美はしい名の小村から近道を敎はつて、何んでも枯草の暖かい山道をぐるぐると廻り登つて八溝山の肩を越えてゐる取上峠といふ峠道に出た。其の峠も下野と常陸との國境になつてゐた。それは四月半ばのあたたかく晴れた日の午前だつた。千米突位ひの標高のくせに、山にかゝつてからどんなに長く私は歩いたらう暖かすぎると言ひたい四月の朝の山のなかを、厚着をした私はまつ赤になつてせつせと元氣よく歩いた。たしかに山は少しも私の行く路を妨げなかつたけれど、思つたよりも山路は長かつた。疲れて私は其の峠の上に座らなければならなかつた。

八溝の頂はそこから枯草と殘雪の尾根を傳へば僅かの時間で行けた。それで疲れてゐたけれど、暫く休んですぐと私は八溝の誰れ一人ゐない、枯草の頂に辿りついて、其處と、其處からのひろい山上展望とを一時間程一人占めにした。あゝ、それは朝からの襯衣に浸みた汗をつぐなつて充分なほどの報酬だつた！　その頂から見廻した八溝の頂あたりは、實に氣持の好い、小さく、可愛らしい優しみのある山の頂上だつた。頂近くの屋根や山腹の淺く、なだらかに窪み込んでゐる落窪には、ところ斑らに未だ白鳥のやうに殘雪の斑點が春の日光にも羽を休めてゐた。私はそこの枯草の上に身体を投げだすやうにして寢轉び休んで、それから渴いた咽喉にがりかりと雪を嚙んだ。それからまた私はその頂の枯れた草の中に、何んと言ふ名だかは知らない可愛らしい青色の花を澤山に見附けた。雪の未だ數尺も殘つてゐるやうな山の中からやつて來たためか、私はこの花の

可愛らしさ、健氣にそんな山上で春早くに咲く小さい、だが強い力の不思議に打たれた。そして花から私の眼をあけたら、またその頂からの山、谿、平野の眺めは馬鹿に愛すべきものだつた。阿武隅の川上の雪後の山はしん〳〵と日に澄んで、黒木山の上にあつた。それから會津境ひ、那須火山群、奥日光の山々も未だ北方の裏日本の雪風にその頂は痛められて、ふかく雪に光つてゐた。四月はじめの春日ではあつたが、山々の輪廓もほやけず、眺望はよくきいてそれからまだまだ下野、上野、信濃の山々、遠くは富士までも見えた。見えたわけである、八溝山より高く、そしてその眼界を遮ぎるといふ山頂は、常陸磐城の兩國にはないからである。けれど私はそのやうな會津境ひ、那須、日光兩毛の雪のある山々の眺望ばかりを期待して此の山頂に登つて來たのではなかつた。

この八溝山脈からつゞいて磐城山地に就いては、既に地圖を擴げてみてもわかるが、八溝山の標高一〇二二米突の山頂を除いては、特に千米突をこえてゐる程の顯著な山は全く無い。即ち山とも言へない程に低い標高しか有しない山々のつづいた一つの山地である。けれど又これほど低い何んの奇もなく山の續いてゐる所で、何處を眞直ぐに突つ切るやうに通つても十五六里以上も歩かなければ主要な交通線には出られないと言ふ所は日本には稀れだ。人烟稀れだといふのでもなく、土地の磽确だと云ふのでもないのに交通は地形上開けない。村は村と谿合ひにつゞいて靜かな永年の生活の根を下し、山もよく手が入れられてはあるのに、何となく山はうら寂しい。道もうら寂しい。旅行者などが特に通つてみるやうな名所古跡の多い街道もなければ、又すぐれた風景もない。唯草原山、名もない雜木山、植林された杉山、淺く、小さな谿あひ、低地、小流、村落が、そこには錯雜してゐるだけである。このことを私は田山花袋の旅行記と地圖の上で知つた。それから私はそこを心に藏ひ込んで置いた。那須の高原より夏の夕暮この八溝から磐城、常陸の山地の低く何處までも續いてゐるのを少つと眺めてから、私にはその八溝山の頂に立つて、八溝山脈から太平洋の砂濱まで續く低い山つゞきの、唯名はあつても名のないやうな山のつぎつぎにうねうねと重疊してゐる磐城山地の姿を一望に見渡してみたく、また親しく其の地に一旅を試みたいと思つてゐた。

そして、今や私はその頂にゐるのだつた。そして、今こそ、この低山地の山々、谿々を其處の一番高い頂上から見渡したのであつた。その山影、谿隅の陰影と日に光る片面が重なり、折り重なつて、黒木山、枯草山、雜木山、杉の青黒い山などの低い山ばかりの、幾ら眺めても低い山ばかりの海と平野とまで遠く續いてゐる、味氣ないまでの山望然し西方の下野、那須野の原を見ると、其處の野面は荒蕪不毛で、如何にも林と野原のみの所らしく、乾燥した色彩でゐるのに、磐城と常陸の國である東方は、山地のくせに却つて如何にも濕り深く、村村のある谿あひと低地のつくる緣りがかつた色あひと蒼味を含んだ黒い杉の林に濕つた色をまとつた山かげなどが、いかにもこの山地特有の、又中部日本の低い山々特有の、古雅で、匂ひ深い色と影とを展べてゐた。それが私の眠にはこゝろよかつた。それは得もいはれず落着いて、しづかに眺めらるるひとつの山頂からの展望だ。私はひとりこの眺めのあたへる地味でゐて、古雅な山地のうちつゞくさまをひとり眺め、眺めては身に感じて喜んだ。そうしてそれから更らにその私の遠く眺める谿あひの影のなかに、進んで身をふれ、心を愉しませることの出來ることをうれしく思つた。即ち私は、常陸の國へとその八溝の頂を下りて、その山つゞきの重なるあひだの久慈川沿ひの谿あひから、しめりふかい村村を通り、茨城街道を歩いて、大子といふその山地のなかの小さな町から更らにこの山地の端れで、漸く輕便鐵道の通じてゐる常陸大宮まで、二日ほど歩いて出ようと、頂の枯草の上に地圖を擴げ乍ら、また現にその行手の立派なレリーフ・マップのやうに望めるその現地を指呼して見乍ら、ひとりで行程を決めたのだつた。

さて、その八溝の頂を畫少し過ぎに辭して、私は枯草、藪、雜木林、杉林、水ぎわとつゞいた細い山路から、谿間の路 村のなかの道へと次第に移りかはつてゆき乍ら蛇穴新田、蛇穴、磯神などの村を過ぎてその晩には今度は作夜とちがつて、國も異ふ常陸の國の谿間の本宮といふ村の、郵便局と旅舍とを兼ねてゐる大きな藁葺屋根の下のこざつぱりとした田舍座敷に眠ることになつた。こゝ常陸ではもう谿間の村々はすつかり春を感じてゐた。私は厚く、重たい、汚れて臭い服を脱いで、旅宿の寛潤などゝいらを着込んで、夜になつてからは村の理髪屋へ出かけ、旅行中に餘りに延びた頭髪

を短かく刈り、雪に焼けた顔色を少しでも薄らげやうと試みた。そこには前に座つた自分の顔が歪んで寫るやうな安鏡が据へつけてあつた。そして、こんな遊び場所もない不便な山のなかの田舎の村では、理髪が矢張り何處でも同じやうに唯一の遊び場所か集り場所と見えて、村の若者から娘等までが打ち交つて、たくさん集つて愉しさうなおしやべりに夜を更かして遊んでゐた。

翌る日もまた私はつゞいて久慈川上流の春風のながれる常陸の村村を呑氣に歩いてゐつた、もうそこいらは手にした地圖を見なくても歩けるやうなところだ。

（以上は大正九年四月九日より同十一日までに亘る一紀行断片である。筆者附記）

寫眞說明

クロステルグリユンホルンは最近鷲朝の木原氏より贈られたるもので、滑降にもつて來いて、登には海豹の皮て降る時より急角度て登り皮なして登る人なんか皆無だとの事。

白雲岳より見たる烏帽子岳は今年七月大雪調査會の活動寫眞隊登山の際に撮影せられたるもので溪間を飾る豊富な雪溪はまだ充分夏スキー享樂の目適を達せしめてくれる。撮影隊は此處の雪溪に於けるスキー滑走を數百尺のフイルムに收めたのであるから近日中に北海道の神秘境も廣く紹介されるてあらう。

川名のアイヌ語解 —2—

山口生

十勝川上流

本稿に於ては十勝川の上流より下流へ向ひ、陸地測量部五万分の一圖幅に從ひ羅列す。

參照圖幅、旭岳　十勝川上流、佐幌岳、然別沼、

十勝川　恐らくは十勝國（トカチ、モシリ）を流れる川の義であらう。トカチモシリとは突出せる國の義。これはこの地方に山岳多く突出して居るに依りかく云ふのであらう。又小泉氏の説に從へば幽靈の川の義にして又トカチアイヌの狂暴をにくんだ語なりと云ふ。

トムラウシ川　花葉の場所を流れる川の義。（前號參照）

ヌプントムラウシ川　Nup は野の義なれども Nupune は Nup 即ち Nuponne に等しければ平原又は野の義なり（小泉氏）前號にても詳述せる如く「トム」は花。「ラ」は葉。「ウシ」は場所の義なり。即ち花咲く原を流れる川の義なり。

カムイサンケナイ川　「カムイ」は神の。「サンケ」は前に。「ナイ」は谷川の義。即ち神前の川の義。

前號にも「ペツ」の義について述べたが今「ナイ」と「ペツ」との相違を述べて見れば

「ナイ」は高き兩岸を有する川。或は水無き溪谷即ち通稱澤と云へるが如き所を指す。一般に次に述べる所の「ペツ」に比して通行困難なる意味あり。

「ペツ」は兩岸の低き、そして時に河床の變化さへある川を指すものにして從つて兩岸に多少の平地あり通行に困難なき川を示すものなり。

ユートムラウシ川　ユーは湯、即ち温泉の義上流に温

泉湧出して居るによりかく云ふ。トムラウシは既述。

ポントムラウシ川　「ポン」とは小なる義即ち小さきトムラウシ川の義。「ポン」に對して大なる義を「シ」と云ふ。例支笏湖（シコツト）大なる谷の義。

シートカチ川　十勝川水上の義。即ち十勝川の水源をなす川の義なり。

トノカリウシユペツ川　「ト」彼方に。「ノ」は英語のing の如く用ひられ進行の意味を示す。「カリ」通るの義ウシユペツは（ウシシペツト）なればウシシは蹄の義にて牛馬何れの蹄をも意味するがこゝにては特に鹿の蹄を意味するならん。即ちオブタテシケ山脈中の主峯オブタテシケ山（標高二〇一二・七米突）及びその東北方に連る小スマヌブリ（一六七一米突）との最低部を十勝越え。又は鹿越峠と云ひ往昔群鹿が石狩十勝兩國を往來する峠であつたと云ふ故に嘗ては十勝の鹿がこの川により石狩の彼方へと通行したるによりかくは名づけられたるのであらうと筆者は思ふのである。

レイサクペツ川　「レイ」は名。「サク」は無い。即ち名無し川の義。

ホロカトカチ川　却流又は後へ向く十勝川（筆者曰、渦を巻きながら流れてゐる義ならん。）

十勝岳　十勝川上流の山の義。

美瑛岳（ビエイ）　美瑛川上流の山の義。ビエイ川は油川又は渦れる川の義なり。

オブタテシケ山　既述、槍の逸る山の義。急峻なるに依りこの名あるならん。

ペンケペツ川　上の川の義。

パンケペツ川　下の川の義。

チカブペツ川　「チカブ」は鳥の義。即ち鳥の澤、或は鳥多くゐる澤の義なるやも知れず。

チカツペツ山　チカツペツ川上流の山の義。

ポロナイ川　「ポロ」は廣大の義。即ち大きな澤の義なり。

サンケナイ川　下る川の義。

ニペソツ川　「ニペ」は木汁の義。「ソ」は失ふ、「ツ」は語尾を強むる語。即ち木汁を失へる川の義。

ニペソツ山　ニペソツ川上流の山の義ならん。

ウペペサンケヌブリ　「ウペペ」は雪を溶かしたる水の義。「サンケ」は下す、「ヌブリ」は山の義なり即ち雪水を下す山の義なり。

上ホロカメトク山　原名「カムイメトクヌプリ」。神の山の義。

下ホロカメトク山　原名「パナクシポロカメトクヌプリ」。下の神の渡る高き山の義ならん。

尙上ホロカメトクヌプリ及び下ホロカメトクヌプリとの中間の一八三七・三米の嶺はアイヌ名にて「ペナクシポロカメトクヌプリ」と云ふ。これは上の神の渡る高き山の義ならん。

ペンケキナウシ川　「ペンケ」は上の義。「キナ」は大なる草の總稱「ウシ」は「ウン」の複數ならん。而して某所に存在するの意義を示す。即ち上の大なる草ある川の義。

パンケキナウシ川　「パンケ」は下の義。以下同前。

イロネウシ川　「イロ」は色の義。「ネ」はある。「ウシ」は場所の義なり。

オソウシ川　「オ」は、つき出る。又は河口の義「ソ」は露岩、瀧の義なり。露岩又は瀧ある川の義ならん。

ペンケナイ川　上の川の義。

ペンケニコロ川　「ペンケ」は上の義「ニ」は木「コロ」は所有するの義。即ち上の木のある川の義。

パンケニコロ川　「パンケ」は下の義。以下同前。

ポンニコロ川　「ポン」は小の義。以下同前。

マカウシ川　「マカ」は開けるの義。即開ける場所ある川の義。

サホロ川　（佐幌川、竿呂川）。平地の中の川の義。

サホロ岳　（佐幌岳。竿呂岳）。平地の中の山の義。

シカリペツ川　（然別川）。奥なし川の義（小泉氏）「イシカリ」と同意義とも云ふ。即ち迂余回折する川の義。（北海道地名解）

シーシカリペツ川　奥なし川の水上の義。（小泉氏）

ユーヤンペツ川　湯のある登る川。

トーマペツ川　沼より出る川の義。

ヌプカウシ山　「ヌプ」は平野の義「カ」は上の義。「ウシ」は場所。「ヌプリ」は山の義。即ち平原の上に聳ゆる山の義。（未完）

（前號訂正）

二十三頁「ムリ岳」の項中、ハマニンク（Elymus mollis Trim.）はハマニンニク（Elymus mollis Trin）の誤植。

同頁終より二行ペチクトはペテトクの誤植。

不可思議な話

加納生

この話は、或は馬鹿々々しいと云ふ人があるかも知れない。また偶然にすぎないと思ふ人もあろう。

しかし、兎も角も事實であることには違ひないのであるから、そのつもりで讀んでもらひたい。

あるとき僕は自分の寫眞帳をくりひろげ乍ら、ふと妙な氣持になつた。と云ふのはそこに張りつけられた寫眞から不思議な聯想を起したのだ。

その寫眞と云ふのはピー・オーに燒きつけられたポストカード判のもので、僕等の仲間の誰かゞ撮したものだろう場所は札幌の場末、その頃僕等が借りてゐた離れ座敷の南向の緣側で板倉と某君と僕の三人がうつゝてゐるものなのである。三人とも羽織を着てゐるところから考へると、恐らく大正十年の春、四月も終りで、山の雪は大方とけてしまひ、スキーにもいゝ加減飽きが來て、どゝかへのんきに歩きたいが、まだ道が悪いと云ふ頃、そのくせだいぶ高くなつた大陽が朝から、ほか〳〵と照つて、とても獨りで家居することが出來ない日曜の、やるせないワンデル・ルストをもちよつたと云ふ樣な顏付で、某君は籐椅子に、板倉と僕とは立ちながら、日なたぼつこをしてゐる形である。

僕を妙な氣持にさせたのは、三人で寫眞を撮してゐることである。それから二年ばかり後に、板倉が死んだと云ふことである。

しかしこれだけならば、大した氣にすることはないので

ある。だが次のもう一つの寫眞を見ると、驚かざるを得んのだ。

それはたしか大正十三年の五月の初め頃だつたと思ふ。アトム判だから、顔などよく解らないが、三角山の麓のアルファシャンツエの下のローンに寢轉んで、燃え立つ陽炎に見入つてゐる樣子で、藤江と某君と僕との三人が、撮されてゐるのである。そうして、その年の暮も、除夜の鐘と共に藤江が逝つた事は、まだ記憶に新なところである。

三人で寫眞を撮せば、そのうちの誰かゞ死ぬとか何とか云ふ口碑を眞面目に信ずる人もなかろうが、僕は知らず〳〵のうちに、二度までも之を犯し、いづれもその三人のうちの一人の死を、事實として迎へたのだ。然も共にアクシデンタル・デッスなのだから氣にせざるを得んのである

故人の運命と、この寫眞とがどんな關係にあつたか知らないが、兎も角僕の頭には、この三人の寫眞は、奇妙な印象を殘してゐることは爭へない。こんなことをかつぐのは唯物論を信ずる人々には全く、馬鹿々々しいに違ひなかろうが、そこまで徹しきれない僕にはやはり、いつも氣がつきさへすれば、大した支障を起さぬ限り、あとで氣になる樣なことは避けるがよいと思ふてゐる。上の二つの場合は二人がなくなつて後まで氣がつかずにゐたのだから仕方がない。

三人で撮すことに前以て氣がついたことが一度ある。その時はわざ〳〵もう一人、仲間をよんで來て、四人で撮したのであるが、皮肉なことに、その四人目の人はそれから間もなく病死してしまつた。こうなると全く解らなくなる。

板倉と藤江とについて僕はこゝにもう一つの事實を書き記して置こう。

大正十二年の春のことだ。湯河原に立山の創痍を療養中の槇氏を訪ねた折、差上げたいものがあるから、是非東京の宅へ寄つてくれとの事であつたので、五月、歸北の途、伺ふと、

「これは私があちらに居た時、使つてゐたものですが、板さんがとても欲しがつてゐたんですよ。それでとう〳〵讓つたんですが大變悅んでね、こんどの立山へも持つて行つて、板さんは大切にしてかぶつてゐたんですが

ね。」

と云つて、蝦茶色の薄絹で出來た、房のついた帽子を、同君の形見に分けてもらつたのであつた。これはあのヴンデル・デス・シユネーシユースの活動寫眞のポスターに畫かれてゐるシユナイダーのかぶつてゐるのと同じ樣なのであつた。その後、僕はこれを大切にしてゐたのであるが、時々部室の中でかぶつたりなどしてゐたが、今から考へても不思議なことは、一度も山へ持つて行つたことはなかつた。藤江はよく之を知つていた。

藤江と僕とは先に書いた寫眞を撮した前年の秋頃から、親しい往來を重ねてゐて、ずい分色々な話をした。電氣を消してストーヴの薪が燃え上るのを見つめて、默つて腰掛けてゐたこともあつたし、深更、二時三時頃まで、議論をして行くことも珍らしくなかつた。彼はよく板倉と同時代に在札せぬことを嘆じ、その人及びアルピニストとして秀れた性格を、兎や角と想像するのであつた。そして終に彼は故人を追慕するの象徴として、僕の愛藏するこの帽子を欲しいと云ひ出した。僕にとつては此の上もない記念物なのではあるが、板倉の形見としては、他に尙二、三點彼が退札の際、をいて行つたものもあつたので、僕は心よくその帽子を藤江にやつてしまつたのである。

その後、僕は彼が低い電燈の下に、この帽子をかむつて明日は試驗だと云ふのに、自分の考案したビンディングをいぢつたりして、欣然たる彼を、しばしば見掛けたのである。

それから彼が靑山の合宿へ立つ前の晩に、僕のうちまでやつて來て　暗い玄關先で、

「あしたから、行つて來まつさ。」

と云ふ聲を殘して、僕が「まあ、上つて行かないか」と云ふのもきかずに、行つてしまつたのが最後。

山で負傷して札幌へ歸つた彼が、その後の經過が、惡化するにつけて、僕はひそかにあの帽子が氣になり出した。とうとうあきらめなければならなくなつたとき、誰かにそつと、藤江があの帽子を合宿へ持つて行つてゐたかどうかを確かめて見た。

僕の杞憂は裏書せられた。

止を得ぬ旅行の爲に、彼を會葬することが出來なかつた僕は、吳々もその帽子を彼の棺に入れてもらふ樣に賴んで

出發したのだつた。

槇さんから板倉へ、板倉から僕へ、僕から藤江へと渡つて行つた、その一つの帽子が、所有者、ことに膚身はなさず持つて歩るいた主人に對して、運命的に何等かの因緣を持つてゐたのかどうか、疑問ではあるが、小さな一つの物が、この世の中に轉々として傳はつて行つた徑路をたどつて、そこに二つの不幸な出來事を見出す人は、誰でも何等か異樣の感を抱くであろふと僕は思ふのである。

藤江と板倉についての思ひ出は、限りないが、ある寫眞のことゝ、この帽子の一件とは、僕にとつて、洵に奇妙な事實として、忘れることが出來ないのである。

或る人は單なる偶然にすぎないと云ふだろふ。他の人は或ひは當然だと肯定するかも知れない。いづれにしても僕にとつて不可思議な話である。

何かしら糸の樣な細いもので、次から次へと運命と云ふものが繫がつてゐるやうな氣がしてならない。〔一九二七年一月京都にて〕

寄贈圖書

山岳	七月一日發行	近畿山岳會本部發行
ペデスツリアン	第二十九號	神戸徒歩會發行
山嶺	七月號	東京野歩路會發行
美登里山岳會々報	七月號	同會發行
キヤンピング	七月號	同クラブ發行
山みち	第五號	山峰會發行

H. U. S. V. 新着圖書

山岳	黑部號	日本山岳會
ポスター		Fédération Française de Ski

藏王日記（承前）

―三枝茂雄君の死―

額田敏
柏木民次郎

一月四日

三時頃に醒めると風がはげしく窓を打つてゐた。天氣が變つたのだ。夜が明けた。義々ではそう大した事でも無かつたが山上は曇つてゐて行かれそうになかつた。人夫衆は万端の仕度を終へた。スキー小屋で天氣模樣を見る事にして義々を出掛けた。山は荒れに荒れてゐた。人夫衆も登る意旨はないらしかつた。後から廿八日にSと同行した人々が應援に來た。明日の天氣を待つ事にして一同義々へ引きかへした。まだ午前中だつたので靴を脱ぐものと思つてNに食事をたのんで一時まで畑で遊んだ。空腹になつたので宿に歸へつた。Sと廿八日に同行した人々は學事の都合で今日全部里へ去つたそうだ。私にはこの人達の心根がわからなかつた。室に入ると

「野外で死んだ者は家の中に入れられぬ」といふ習慣がこの地方にあるといふ事を宿の主人から聞いたのでNはブン〳〵怒つてゐた。それではSを義々へ下した後どうする積りだらうと私もはたとよわつた。東京からSの兄さん達二人が見えた。やつぱりSは骨肉の手でなければ動かないのかと思はれてならなかつた。夕方二人は私達の室に見えた話しは話しにつゞいた。父親さんはS發見と聞いてそれはよかつたと云はれたそうだ。明日を待つ心は待ち遠うだつた。人事を盡した上は天命を待つの外はなかつた。

一月五日

思はしくない天氣だつた。昨日よりはよかつたので八時に人夫衆と共に宿を出た。青根の區長さんは今日はよさそうだと意氣込んでゐた。スキー小屋で種々の道具をとつて十四人とNと私と合せて十六人カナカラ佛に向つた。養の磧の風は强かつたが寒くはなかつた。是地で一休した。Sの兄さんは人夫を一人連れて來た。區長さんは二中生遭難當時を物語つて私達に吹いた。磧をこえて後見坂まで登つた。天氣はよくならなかつた。又退却ときまつた。居場所もはつきりとして居るのに行く事が出來なかつたので殘念でならなかつた。私は一氣に義々へ下りた。天氣の恢復も何時になるか知れないので人夫衆を一と先づ里に返す事にきまつた。私は半分位殘したかつた。明日にもよくなるかも知れないそれが天氣なのだ。かくして二日は又空しく過ぎ去つてしまつた。

一月六日

Sを發見してから三日目の朝は明けかけた。Sの兄さんは闇い内に私達の室に來て障子越に天氣のよい事を傳へた天氣がよければ青根遠刈田から登つて來るといつて下つた人々が果して間に合ふやうに來るだうかといふ不安があつたのでYを遠刈田にスキーで走らせた。三人の炭燒の人々の應援と義々の若者二人と私とNとSの兄さんの一人と合せて八人で先發として八時に義々を出た。もつともつと早く出たかつた。スキー小屋で道具をとり出して養の磧を横過つて行かうとした時に青根の人々十三人が區長さんに引率されて來た。スキーはNと私と二人だけだつた。雪質が非常に惡かつたので脱いで人夫の手で持つて行くやうに賴んだ。暖い暖い山だつた。刈田岳の頂上まで私はシャツ一枚になつて手袋も無しに登つてしまつた。十一時過ぎる頃であつた。頂で一同中食をとつた　長休みもせずに現場へと急いだ。私とNはスキーを穿いた。アザラシが具合が惡かつたので私は一人ずつと後れて着いた。Sの兄さんは默然として祈をさゝげてゐた。しつとりとした空氣に私はもらひ泣きをした。太陽はカンカンに眞冬の雪を照してゐたSの發掘が始められた。雪がはねのけられてSの全容があらはれた。スキーを穿いたまゝ横臥してゐた。何とも言はれぬ感にうたれた。Sの着衣と携帶品(身につけてゐた物)が區長さんとSの兄さんとNとの三人で調べられた。私は

側で次の様に書きとつた。(雜然としてゐるが當時をしのぶためそのまゝこゝに書く)

左手　毛皮手袋(片方はリツクサツクの中にあつた)

右手　防水布手袋(この下に毛糸の手袋があつた事と思ふ)

上着の下にスウエーター(毛絲製)

スキーは兩足共穿いたまゝ

帽子は横向き、

兩杖の一本は左手にかゝへたまゝ

眼鏡は掛けてゐない。

上着のボタンは一番上だけはづしてあつた。

上着外側の左ポケツト

時計(六時四十分にて止まつてゐた。)

色眼鏡、自身の眼鏡(Sは常に眼鏡をかけてゐた)

上着外側右ポケツト

呼子、バロメーター、チヨコレート

上着外側下のポケツト

磁石、(サツクは体の外に出てゐてサツクに入つてゐなかつた。)

寒暖計

地圖二葉(陸地測量部五万ノ分一、白石、上ノ山)

ズボンの右ポケツト

手拭一、革バンド一、

上着内側右ポケツト

小楊子一、仁丹(函入)

上着内側左ポケツト

紙若干、糸二本

次に私達はリツクサツクに移つた。

口をくゝる紐が解けてゐて雪が入つてゐた。

アザラシ皮はたゝまれて殆ど上部にあつた。

コツホアパラートはバンドが解いてあつて火を試みた形跡があつた。

黒パンは端が少しかぢつてあつた。

ムスビは一ケ殘つてゐた。

(その他は前記携帶品と大差は無かつた。只砂糖のついた豆若干が入つてゐたそうだ。これ等の事は大河原でリツクサツク内容物を調べた結果判つたのである。衰々で我達が調べる筈であつたので山では概略調べておいたの

に色々の都合で急に大河原まで直行する事になつて私とNとは同行しなかつたので内容を全部よく調べる事が出來なかつた。)

リックサックのあつた所とSの体のあつた所に標が建てられた。Nと私との仕事は大体終りを告げたので二人で熊野岳の三角點とおぼしき所に登つた。その附近にも人のさまよつたと思はる跡は何物もなかつた。二人は雪の景色に見とれてしまつた。冬の午後の空は澄みきつて藏王を圍む山々の美容は叙景に絶した。栗駒山を背景にした泉船形の群山、大東山から雁戸に續く峯々遠く鳥海山の富士形、月山の雄大な横臥、光つた朝日の山々から飯豊の連山、吾妻、安達太郎山の山塊が長く遠く右から左に展開されてゐた。刈田岳は手近に呼べば應へた。南藏王はそこから南へと走つてゐた。見飽かぬ景色に別れを告げてもとの所へもどつた。かすかにSのスプールではないかと思はれるスプールらしきものがリックサックのあつた所から左上に走つてゐた。定かでなかつたので何とも言へなかつた。Sを運ぶ橇は組み立てられてSはあさましき莚包となつて橇上の人となつた。記念の寫眞をとつた。橇は二十何人かの人々によつて引かれて行つた。二時頃だつた。Nと私は後から橇を追つかけて馬の脊で追ひついた。一足先に刈田岳の頂についた。Sの橇はまだ馬の脊を通つてゐた。熊野の雪はSを旬日の間守つてゐた。今は壯嚴に見送つてゐた。私はNの後を追つて下りを急いだ。刈田の麓でふり返つて頂を見た時に丁度橇は頂から下る所だつた。雪上の葬列、私は胸が一ぱいになつた。山に遊ぶ者の本望ではないかと思はれた途中スキー小屋でぬるま湯に渇をなほして四時前に下り終つた。Sの橇はしばらくして義々に着いた。部長さんが見えたがお醫者が見えないので大河原まで直行する事にきまつた。人夫衆は夕食にと去つた。Sの義兄とNと私とで小さな火にあたりながら外に置かれたSを見守つた。日はすつかり暮れて人々の互の顔もわからないやうになつた。濁川の音のみさびしくさゝやいてゐた。幾つかの提燈はともされた。仕度も調つて別れの埃拶がかはされた。Sは永遠に義々を去つて雪の道を遠刈田へと行つた。提燈の列が狐火のやうに曲角で次第次第に消えて行つて最後の一つとなつた時のさびしさはなかつた。全く闇の中に消え去つて

Nと私とは只二人取殘された。北極星は山の端にきらめいて濁川の谷の間にオリオンの三つ星が輝いてゐた。

一月七日。

Sは夜の内に大河原で茶毘になつて再び遠刈田にもどつて來た。Nと私とは正午まで遠刈田に下る積りで裳々を出た。温泉宿が見えなくなる所に來た時に子供達が別れの聲をあげた。私は帽子を振つて答へた。Nも答へた。旬日起臥した宿には心は引かれて別れのかなしみは心に湧いた。是でスキーを穿いて不動の瀧で二人のリックサックを持つて送つて來てくれた宿の若者二人を歸へした。長い間降雪がなかつたので量も少く質も惡かつた。それに加へてリックサックが重かつたのでスキーを利用したのはほんの僅かだつた。

Sの遺骨の入つた白布包の函が床に置かれて簡單な神式が佐藤某の二階の一室で行はれた。小人數のしめやかな式だつた。天氣は雨になつた。一層心にさびしさを增した。元氣よく輕便でつい先にスキーを持つて來たSは小さな白木の函の中に入つて骨肉のひざの上にのつて自動車で故鄉へと大河原に去つた。Nと私とは裳々の人々に送られて五時に輕便で大河原に出て仙臺へ歸つた。(柏木記)

日記の後に。

三枝は藏王熊野岳に倒れた。そして永久に眠つてしまつた。藏王は彼が最初の雪の山であり又最後の山であつた。彼はあまりに藏王に馴れ過ぎて居たのではあるまいか。慈悲深き内にも嚴然として居る大自然の尊嚴を少し見くびつたとも思へやう。而し吾々の仲間では一番山に長く親んだ山男であつた。中學校の二年生の四月青梅から只一人大菩薩峠を越して鹽山に出たのが彼の初めての山旅であつた。それ以來よく只一人では秩父へ入つた。そして富士裾野、甲斐の山で時々小さな山旅の困難に遇つた。歩む事が出來なくなつた事もあつた。草に置く露を舐めて一夜を過した事もあつた。だから旅の危險性については多少の經驗はあつたはづだ。出發當時の荷物を考へても山を輕く見たとは思へない。スキー術は下手であつた。それが友と離れた第一の原因であつた。それから後の彼が倒れた直接の原因は何人も確實に知らない。山好きの三枝は彼の最も知つた山藏王で逝つた。(額田記)

くだくだしく旬日の日記を二人して書き綴つた。何を言つても三枝は歸へつて來ない。只死に至つた經路を考へて見たいのは人情だ。又私達の義務と考へられてならない。殘念の事にははつきりした事は只三枝が一行と別れた地點だけだ。その後は總てが暗黑に裏まれてゐる。想像をめぐらすのみに過ぎない。只

一、遭難地附近の地理を一行中最もよく知つてゐたはづの彼が歸へれずに、外の人々が豫定の時刻に歸へつて來たこと。

二、準備は相當にしてありながらそれを何等利用する事なしに死に至つた模樣のある事。の二項は私には永遠の謎である。

又暖い春が來た。やがて藏王の雪も融けやう。記憶は次第にうすらぎ勝だ。私達の山の仲間の誰れしもが彼ともつともつと長く共に滑り、共に山に遊びたいと思ふだらう。太陽が南へ去つて、又私達がスキーを擔いで峩々に行く時は來るとも、うす闇い爐邊で彼のまじめな戯言を聞由はない。（柏木記）

（昭和二年三月廿七日）

ゴシップ

テイネパラダイスヒユッテの工事に取掛かつたのが丁度一年前の今頃であつた。當時一緒に仕事をした連中が寄り合ふと、よくあの頃の苦しかつた思出話をするのであるが丸太の不足だとか、材料の運搬だとか、大工の難題だとかと言つて隨分苦しい思をしたのであつたがいざ完成されて使用が開始されてみるとすばらしいもので、冬期の盛の頃には我も〳〵と手稻山の登山者が增加して、概算ではあるがある日曜などには八百名からの登山を者見、千米近くのヒユッテ附近が完全に立派なスキー場と化し、札幌の市街が春の雪溶でドロ〳〵になつた頃でもヒユッテに行きさいすればスキーを充分享樂することが出來、ジャンプさへ出來る樣になつた。で今になつて考へてみると萬難を排して造り上げた甲斐が充分ある樣な氣がする。然しこう使用が盛になつて來ると夏季は左程でもないが冬期それも宿泊の場合に本シーズンも今迄の樣に宿泊の希望者が澤山あると不本意ながら幾分制限の樣なものをつけねばならなくなるのではあるまいか。然し之は恐くは杞憂であらう、最近に札幌附近にいま一つヒユッテが建設さるゝ樣になつたから。

曩にテイネパラダイスヒユッテの建設にあたり之が設計をされたマツクスヒンデル氏が豫科の獨逸語講師グブラー氏並に醫學部の山崎教授と共力して餞函から定山溪に至る途中小樽内川の上流にヘルペチヤヒユッテを建設さるゝことになり、七月中旬からヒンデル氏、山崎教授が眞先に立ち、自らマサカリやオノを手にしてアイス三名を指揮しそれに北大スキー部員並に山岳部員が手傳をし、八月中旬までに竣工の豫定で建設工事が開始された。我ヘルペチヤヒユッテは八坪で收容人員十五名、テイネパラダイスヒユッテ同樣スイス風のヒユッテである。附近一体白樺の林に蔽はれ、小樽内川の谿流に望み、周圍は屏風、朝里、白井の諸嶽に圍まれ、やゝ離れて余市、天狗、烏帽子の峻峯を控へたるヘルペチヤヒユッテは竣工の曉にはテイネパラダイスヒユッテと共に夏冬多數の人々に使用さるゝことになるであらう。尙此ヒユッテは竣工と同時にヒンデル氏等により北大スキー部並に山岳部に寄贈さるゝ由である。（オガハ）

全日本スキー聯盟

ジャンプ採點法改正

着陸

(a)着陸の瞬間に轉倒せる場合は一〇點を減ず。

(b)着陸後の轉倒の場合

此場合の減點は轉倒個所に關係すべきものである。

(1)不良なる着陸が直接の結果なるか或は又その繼續として觀察せらる場合は減點八—一〇點

(2)着陸後の滑走距離を定むることは困難ではあるが一〇乃至一五米は少く共完全に平衡を保ち、滑走し、而して轉倒したる場合、減點四—八點

(c)競技者が着陸に當り兩手を地面に觸れたるか、或はスキー上に腰を戴せたる場合、此場合の減點は轉倒の場合に準ずるものである。

(d)其他の場合の減點は次の如し。

兩スキーの交互に着陸せる場合　二—四點

一方のスキーの上向せる場合　一—二點

一方のスキーの摺れたる場合　一—二點

着陸不安定　一—三點

頑な着陸　一—二點

着陸後不安定の滑走を繼續して居る場合　一—三點

兩スキーを開き着陸せる場合　一—二點

競技者が着陸後直滑降の姿勢に服せざる場合　一—二點

「山とスキー」バツクナンバー

唯今左の號數の殘本を所持して居ります。御希望の方には喜んでお頒ちします。

第一年目

一號—十三號　絶版
十四號十五號　僅少

第二年目

十六號十七號　絶版
十八號—二十六號　僅少

第三年目

二十七號—三十號　僅少
三十一號—三十四號　絶版
三十六號　僅少
三十七號　絶版

第四年目

三十八號—四十九號　僅少

第五年目

五十號　極少
五十一號—五十三號　僅少
五十四號　絶版
五十五號　僅少
五十六號　絶版
五十七號—六十號　僅少

第六年目

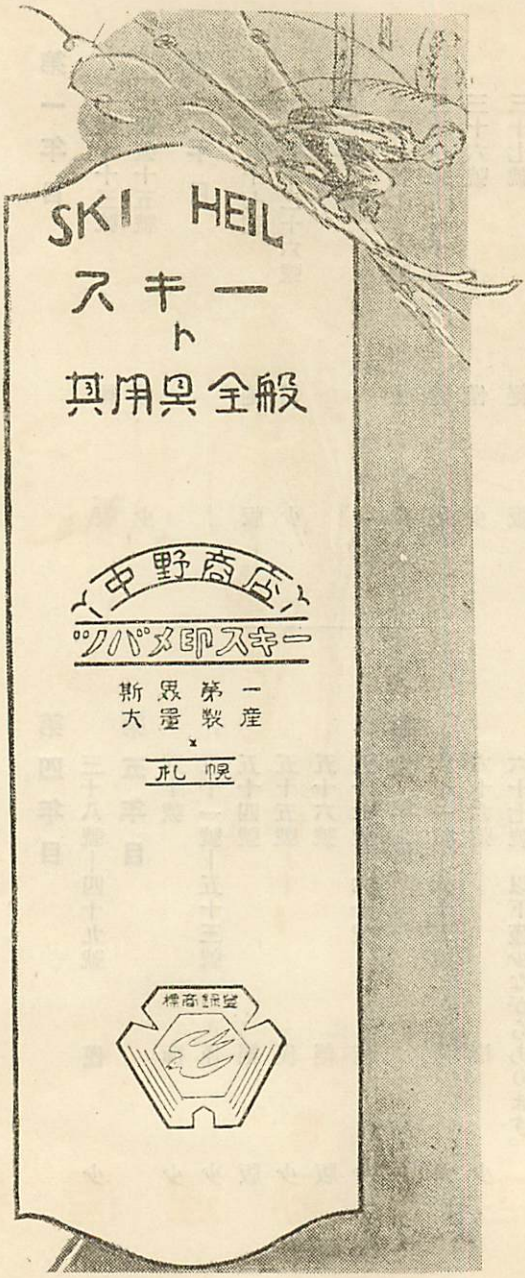
六十一號—六十五號　僅少
六十六號　極少
六十七號　以下僅少ながらあります。

右の内二十六號及び五十號は倍大號につき定價金六十錢、他は何れも一部金三十錢であります。

昭和二年四月調

山とスキーの會

自信ある本年度製作品



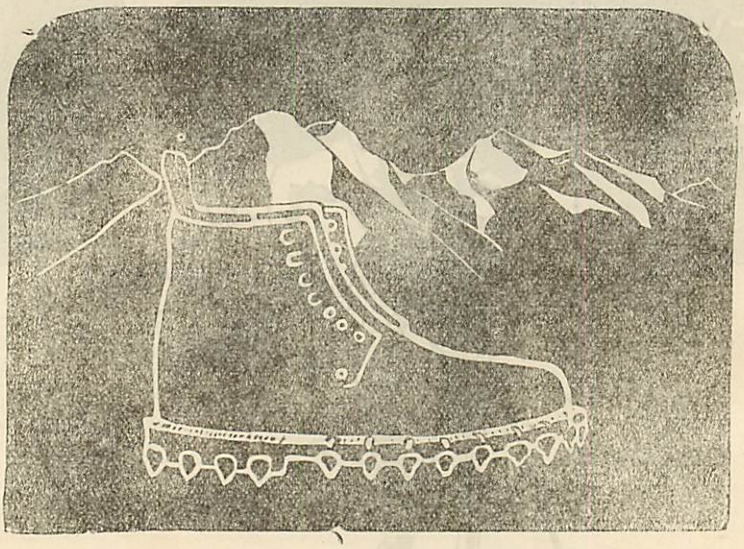
優秀ナルトーキス其用具

小樽

梅屋運動具店

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ

一等賞金牌受領



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川七一二番

振替東京六一二七番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定價　金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時の御知らせは最後の分の包裝中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

昭和二年七月廿八日印刷
昭和二年八月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯者　井出英次
印刷兼發行者　廣田戸七郎
印刷所　札幌印刷株式會社
北海道札幌市北一條西二丁目
發行所　山とスキーの會
北海道札幌市北四條西十二丁目一番地
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 74. Augusto 1927. Sapporo. Japanujo.

大正十二年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和二年七月廿八日印刷納本
昭和二年八月一日發行

山とスキー 第七十四號

定價金參拾錢

Mimatsu Special Sporting Goods
for
Everything in Summer and Winter-Sports.

美滿津特製

夏と冬との各種スポーツ用具！

■ 型錄「春より夏へ」進呈 ■

HONGO, TOKYO, JAPAN.
MIMATSU & COMPANY, INC.

合名會社
美滿津商店
東京、本郷、赤門前